

## 追悼 野口猛さん

## 野口猛さんの思い出

小平桂一

(元国立天文台台長, 日本学術振興会ボン研究連絡センター, マックスプランク電波天文研究所ボン)

野口猛さんが亡くなられた。療養生活ののち8月19日に他界された。私はドイツに駐在していて、10月になってからこの訃報を受け取った。日本国設大望遠鏡 (JNLT: 後の「すばる」) 計画の立ち上げ期に、同志として協力した仲間の一人である。当時から、物静かで一人で酒でもくんでいるのが似合いそうな感じの、確かな信頼の置ける人だった。

私が野口さんを知ったのは岡山天体物理観測所に入出入りするようになった1960年代半ばのことである。駆け出しの研究者で大望遠鏡観測の経験皆無だった私には、観測所付きの技官の人たちが「望遠鏡の達人」に見え、いろいろとお世話になった。野口さんもその一人で、一同の中ではやや年長組のようだった。その後間もなく、大型シュミット望遠鏡を主力とする木曾観測所を立ち上げることになると、野口さんは岡山から木曾に転勤になり、やがて木曾観測所で私もお世話になることになった。木曾では岡山での経験も積んでいる野口さんの技術貢献が大きく、のちに岡村定矩さんと挑戦した特別推進研究「銀河の定量分類」に取り組める素地も築いてくれた。木曾観測所が軌道に乗ると、野口さんは三鷹に移ってきていたようで、私が東大本郷から三鷹に移ってJNLT計画を本気で推進しようとしたときに、当時の東京天文台で最も大型の望遠鏡や観測所を知っている技官として、野口猛さんに協力をお願いする巡り合わせになった。

技術検討会などでは、まずは一緒に勉強するだ



木曾観測所40周年式典の際の野口さん。

けだったが、やがて現地調査が始まり、設置候補地のハワイ・マウナケア山頂で地表乱流調査をする段になって、現地への技術スタッフ派遣が必要になった。ハワイ大学の協力も得て30 mの測定マストを発注し、それを現地で受け取り組み上げ設置してデータを取得・記録する業務だった。中桐正夫さん、宮下暁彦さんらが先陣を切って駐在し態勢を整えてくれたが、マストの現地への到着が遅れたりして、最後に野口猛さんにも行ってもらって、どうやら有効なデータ取得に漕ぎつけられた。ハワイ現地駐在の最初とあって、当時の不便や苦労はたいへんなものだった。

見通し不明の予算要求が続く数年の間、「すばる」室の概算要求書作成事務は野口さんが中心になっていたように思う。装置、施設、部門要求と多岐にわたり、国立天文台の事務部も初めての外

国設置、超大型施設とあって手探り状態で、野口さんは、技術検討会に参加してきた企業の技術者や営業担当者との間に立って、地味な大量の仕事を着実にこなし続けていた。1991年に予算が付き始めて望遠鏡建設が始まると、「すばる」室の業務は一挙に増えて、プロジェクト関係者も急増し、私も台長になったりしたために、直接一緒にする仕事は少なくなってしまうが、野口さんは律儀に台長室に立ち寄っては、「すばる」室の進捗状況を報告してくれた。

JNLTが「すばる」となり、10年近くの歳月を経て1999年に完成を迎えたとき、ハワイの式典に紀宮様がお越しくださるので、何とかして「すばる」望遠鏡の映像を肉眼で見させていただこうという案が飛び出した。「すばる」望遠鏡は電子カメラを装着して、すべて電子画像で処理するようになっていたので、肉眼で見るためには特別な装置を工夫しなければならぬ。ハワイ観測所はすでに海部宣男所長のもとに発足していて、この肉眼観望用の装置製作を担当したのが野口猛さんだった。紀宮様の観望は無事に済み、翌日の式典での「お言葉」では、前夜にご覧になられた「すばる」天体映像の見事さを称賛された。

間もなく私は国立天文台長の任期を終えて、2001年から総合研究大学院大学の学長として葉山に住むことになり、宮崎聡さんの助けを借りて「すばる」主焦点で撮られたアンドロメダ銀河の映像解析をするために週末に人気のない三鷹の開発実験棟に通う以外は、国立天文台にも、そしてハワイ観測所にも、気安く立ち寄る機会がほとんどなくなってしまった。

お会いすることも絶えたその頃になって、かえって野口猛さんの動静を追うようになった。というのも、彼がJICAのシニア海外ボランティアになって、発展途上国の教育用や研究用の中型望遠鏡を設置する天文台の立ち上げに飛び回っているのを知ったからである。彼のほうも、愛妻の治美さんとともに千葉県九十九里浜のみさき町に居を

移して、三鷹と往き来するにも、交通の便が良いとは言えなかった。しかし年ごとにいただいた年賀状には、ご夫婦のおそろいの写真とともに、いろいろな国を訪問した便りや、治美さんが地元のダンス教室で活躍されている様子などが綴られていて、訪れたことのない国々の風物や、白砂青松の九十九里浜近くのお住まいでの生活ぶりを、楽しく想い浮かべることができた。

「そのうちに一度はみさき町に野口さん夫妻に会いに行きましょう」と家内と話していたが、2008年に総研大学長退任後、日本学術振興会のボン研究連絡センター長を引き受けてドイツに駐在赴任してからは、その実現も遠のいてしまっていた。

それが、意外な経緯で再会する機会が巡ってきた。

この前野口さんに全く久しぶりにお会いしたのは、拙著「宇宙の果てまで」を成相恭二さんがコツコツと英訳してくださって、“Makali'i in Hawaii”として国立天文台から電子出版されることになり、今までお世話になった出版関係の方々を中心に小さな集まりをもった今年5月中旬のことだった。「すばる」は大勢の人たちの協力で完成したのだが、小ぶりの集まりなので、参加者は出版関係者とJNLT計画初期の少数の関係者だけに絞らざるをえなくなった。野口さんに声を掛けたところ、九十九里浜の遠方から都心まで出て来てくれると言う返事が返ってきた。急な話でもあったが、「すばる」完成式典にお出でくださった黒田清子様も参加して下さることになった。私は式典前夜の紀宮様の肉眼観望には装置製作者の野口さんも付き合ったものどばかり思っていた。ところが野口さんは「僕は、装置は作ったけれども、式典前夜は山頂には上らず、紀宮様にも直接にはお会いしていません」と言って躊躇していたが、当日は黒田清子さまとにこやかに会話を交わしていた。

後で知ったが、このときすでに病気が進んでいて、いったん自宅に戻っての療養中でもあり、治

美さんが付き添って来ようとしたのを振り切って、一人で遠路を都心まで出て来てくれたのだそうだ。いかにも「野口さんらしい」話である。

想えば、彼が居たお蔭で、岡山も木曾も、JNLTも、どこかで、安心して居られたような気が

がする。

奥様が気掛かりだが、彼は「彼なりの人生を全うしたのだ」という気がして、今は静かにご冥福をお祈りしたい。

(ボンにて、2016年10月10日)

## 野口猛さんを悼む 前原英夫 (元国立天文台岡山天体物理観測所長, 金光学園中学・高等学校)

10月初めに野口猛さんのご子息から封書が届いた。怪訝に思いながら封を切ると、薄墨の毛筆で「去る8月19日に享年76歳にて永眠いたしました」という文言が目に入った。えっ、青天の霹靂、思わず絶句した。つづいて、家族にて密葬されたこと、しばらく闘病生活を送っていたとのこと記されていた。奇しくも私自身も少し体調を崩し、大人しくしていた時期と重なっている。

野口猛さんは私と同年(1940)の生まれで、半世紀にわたる付き合いがある。取るものもとりあえず、奥様の治美さんにお悔やみの手紙を書いた。数日後奥様から電話をいただき、お二人で過ごした日々や最期の様子などを、涙とともにお聞きした。彼は病状が進む中で、わが身を嘆くことなく、なすべきことをなし、家族に囲まれて静かに息を引き取ったとのことである。彼の人生を生き切った大往生であると思う。

私にとって、彼は有能な仕事仲間であると同時に、仕事を離れたら建前も遠慮も要らない、気の合う友であり続けた。私たちには多くの接点がある。岡山および木曾の観測所に勤務し、望遠鏡・観測装置の製作や維持管理に心を砕き、現地スタッフとして天文学の研究を進めてきた。私たち二人の接点について少しばかり語りたい。

1960年代私は大学院生として先生や先輩の観測手伝い、自身の課題研究のため、足繁く岡山天体物理観測所に入出入りしていた。滞在中は、夜間晴れたら観測、曇れば写真処理と深夜喫茶(待機室)

で過ごした。現地には昼夜技術系職員が詰めていて、望遠鏡操作やトラブルの対処にあたっていた。野口さんは開所(1960)以来のスタッフとして「頼りになる」存在であった。お蔭で、私は岡山での観測をまとめて博士論文にすることができた。

1970年代に入ると、長野県木曾の地に105 cm シュミット望遠鏡を建設する計画が動き出した。この望遠鏡は36 cm角の大型写真乾板に広い天域を写す、サーベイ向きの望遠鏡である。1972年私は東京天文台(三鷹)に新設の銀河系部に採用され、この建設に参加した。すでにその任にあった高瀬文志郎、石田恵一(共に故人)のお二人に合流し、連日設計や打合せに明け暮れた。1974年に木曾観測所の開設を迎え、シュミット望遠鏡が地元や関係者にお披露目された。

観測所の維持管理には現地で実働する職員が必要である。まず、若手技術者の青木勉、征矢野隆夫の両君、助手の浜島清利さん、事務・実務を取り仕切る田中亘さんが赴任した。そして、岡山で最も実績のある野口さんに白羽の矢が立った。1975年末に私は三鷹から木曾へ、彼は岡山から(三鷹勤務の)木曾職員として、二人同時の異動が発令された。こうして、高瀬・石田両氏を補佐し、望遠鏡と施設をフルに活かすための体制が固まり、自然に恵まれた木曾の地にサイエンスの種がまかれた。

木曾観測所では観測から研究まで現地で一貫して進められる態勢が整えられた。レジデント・ア

ストロノマーが研究を主導し、特に、銀河系の構造、銀河の表面測光、広域サーベイ等の研究が組織的に進められた。またそのために、大型乾板のデータを測定し記録する測定機が相次いで製作・導入された。これらの装置には、大型乾板に特化した載物台、リニア CCD カメラ、デジタル出力等の新しいシステムが採用されたが、その立ち上げ・調整には野口さん主導の技術力が不可欠であり、私たちは複数の装置・作業を抱えて連日目の回る忙しさであった。

木曾シュミットには、ほかにも多くの新しい試みを取り入れられた。その一例として、望遠鏡制御やデータ解析用にミニコン（紙テープを媒体とする 16 ビットの計算機）が導入された。そして、この計算機を用いて、現地で保存・管理を行うための乾板検索システムを立ち上げた。これらのシステムの発想や開発は、野口さんと私のコンビで試行錯誤の末に実現できたものと自負している。天体データの管理・検索のためのシステム SMOKA のルーツであると思う。

1977 年本観測に入ると、全国に散在する共同利用研究者との情報交換と技術開発のためのシュミットシンポジウムが毎年開かれるようになり、新たな研究テーマやそれを可能とするための機器開発への推進力となった。関連研究者が木曾の地に集結し、研究と技術の融合した賑やかな研究会となり、我が国の望遠鏡の将来計画までが議論された。こうして木曾のサイエンスに大輪の花が咲いた。

こういう状況の下で、野口さんが発案した「技術シンポジウム」が産声を上げ、やがて単独のシンポジウムとして独立し、個々の組織や観測所に分散している技術者が一堂に会した。これが技術開発を進める推進力となり、さらには天体観測に限らず広い範囲の技術交流へと発展した。このような考え方は、後のすばる望遠鏡の機器開発につながっていると思われる。

ここまで書いてくると、野口さんはいかにも「仕事人間」と映るかもしれない。実際には、彼は

遊びにも結構熱中した。観測所の昼休みの野球や卓球、キノコ採りに加わっていたが、下界で行われる忘年会や打ち上げ、職員の慰安旅行にも常連として参加していた。プライベートな面に関わる話題は少なかったが、彼が時折語る家庭での良き夫、頼りになる父親ぶりは実に微笑ましいものであった。

時は移り、国立天文台への改組（1988）に伴い、木曾観測所は東京大学が所管する観測センターとなった。ご存じのように、木曾は写真から CCD への転換を進め、時代のニーズに応えながら、今も新天地を切り開いている。

この改組と前後して、彼と私はほぼ同時期に木曾を離れた。彼はすばる望遠鏡として結実する、大望遠鏡準備のクルーに加わったが、私は彼の故郷である岡山の観測所へ配置換えとなった。その後岡山では本格的な共同利用を推進し、すばる稼働までの観測を一手に引き受け、技術と人員等で建設の後方支援に回った。

このようにして、仕事の面では長年同じ釜の飯を食ってきたが、個人的な付き合いもずっと続いた。同い年なので、2001 年 3 月に共に 60 歳の定年を迎えた。その退官記念パーティーは、示し合わせて合同の会としてお願いし、三鷹、岡山、木曾の職員やすばる望遠鏡のメーカーの方にも参加していただき、盛大に執り行われた。二組の夫婦が並んでお祝いを受けたが、今でも記憶していることは、二人とも新たな人生にチャレンジすると誓ったことである。

ここで、定年後の人生にも触れておきたい。彼と私は、現役時代とは別のスタンスで社会に役立つことを希求してきた。彼はその言葉どおり、パラグアイ、ナイジェリア、エジプト、中国などに赴き、望遠鏡の操作や調整、天体観測の方法を海外の人たちに伝授した。他方では、社会福祉士の資格を取り、成年後見人という難しい仕事を引き受けていた。そして、用事で岡山に来ると拙宅に寄ってくれ、再会のおしゃべりを楽しんだ。彼は最期まで一等星のように輝き、言行一致の十数年

間を生きたと思う。

それに引き換え、私は岡山の地に蟄居し、地域の教育や公開施設の運営を支援していた。彼の活躍と比較すると、われながら等級差を感じる。しかし、生き長らえる者は、その分だけ長く輝かないといけなとも思う。彼との長く深い交友を糧として、私なりに意義のある人生を送りたいとの思いを強くしている。

かけがえのない友、野口猛さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

2016/10/20



定年退職者送別会（2001年3月30日）での野口御夫妻。

## 野口猛さんの思い出

岡村定矩（法政大学理工学部創生科学科）

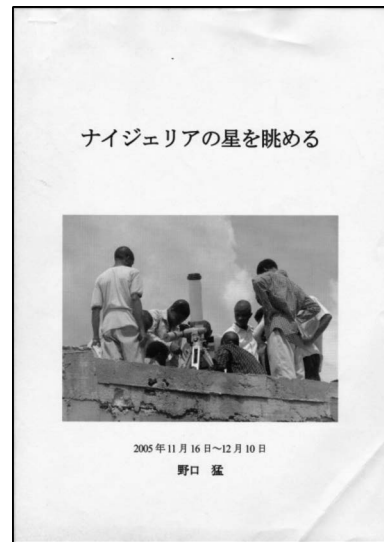
10月はじめに届いたご子息からの封書を開けてわが目を疑った。そこには野口猛さんが8月19日に亡くなられたとあった。実は野口さんとは5月14日に会って談笑したばかりでした。その日は麻布の小さなレストランで、すばる望遠鏡の建設ストーリーを描いた小平桂一先生の「宇宙の果てまで」を成相恭二先生が英訳された「Makali'i in Hawaii」が、国立天文台から電子出版されたことを祝う内輪の昼食会が行われた。20年ぶりにもなる懐かしい顔ぶれに混じって、すばる建設に大きな功績のあった野口さんもちろんいらっしゃいました。時折会う私たちの会話は最近では昔話が多く、最後はいつものように「あの頃は面白かったね」といって終わりました。所用のため中締めで会場を後にすると、駅までの道でまた野口さんと会ったのです。「家が遠いので帰るまでにはまだ大分かかりますね」と言ったのが最後の会話となりました。

私が野口さんと初めて会ったのは大学院生として観測に行った岡山観測所である。口数の少ない野口さんは、技官の中でも年長で、近寄りやすい孤高の人のような印象でした。その野口さんがシュミット望遠鏡の立ち上げの技術責任者として

木曾観測所の所員（三鷹勤務）となり、木曾に私が高米の助手として赴任したのです。野口さんの仕事に対する熱意といろいろな工夫を生み出すアイデアの豊富さはまさに賞賛すべきものでした。もはや死語になった「ミニコン」（主記憶24 kB）による望遠鏡の制御ソフトを機械語で書いたり、ポリ浴槽を使った写真乾板自動現像機の試作をしたり、新型のTV式座標測定機を開発したり、ハード・ソフトを問わず縦横無尽の活躍でした。私が一番驚いたのは、前原英夫さんと開発した、撮影乾板カタログの検索システムです。アセンブリ言語で書いたミニコンのプログラムで、当時のオープンリールの磁気テープを書き込みも可能なランダムアクセスメモリとして使ったのです。こんなことを思いつく人がいるのだと仰天しました。検索をするたびに、テープが巡回転と逆回転を頻繁に繰り返す、人の背丈ほどもあるテープデッキのアームが、壊れるのではないか思えるほどガタガタ音をたてて激しく振動したものです。野口さんは青木勉君や征矢野隆夫君ら木曾の若い技官の先生として、また、われわれレジデントの研究者の相談相手として、まさに木曾シュミット

の立ち上げと運用体制の礎を築きました。1984年に小平桂一先生を代表とする特別推進研究が採択され、形式上ただ一人の研究分担者であった私が、天体画像処理システムの木曾観測所への導入の責任者になりました。故 石田蕙一所長をはじめ所員全員に助けてもらいましたが、野口さんには会計と渉外の仕事もお願いし特にお世話になりました。数千万円で購入した写真乾板測定機(PDS2020GMS)による測定効率の悪さが問題でした。組み込みの対数アンプが遅いので、写真乾板の回転角度の微調整が難しいのが原因でした。野口さんは、専用の回転台を設計製作して取り付け、技官の樽沢賢一君を指導して5倍応答速度の速いアンプを自作して置き換えてくれました。これで画期的に測定効率が改善しました。

野口さんのお付き合いしてみるとすぐに、初対面で感じた「近づきたい」という印象が全く違っていたことに気がつきました。仕事の話も楽しそうに話すし、飲み会も好きで気が合いました。滅多にプライベートなことは話していませんでしたが、とても愛妻家であることはよくわかりました。木曾では飲み会の後カラオケが定番でした。野口さんは歌がとても上手でしかも魅力的なハスキーボイスで、歌い始めると、他人が入ってはいけなように感じられる彼独特の世界が広がりました。それもあってか、「孤高の人」という私の印象はずっと続きました。定年退職直後のことですが、野口さんは、望遠鏡による天体観測を大学



ナイジェリア滞在記の表紙。

生に指導するためにナイジェリアに3週間滞在しました。限られた人に私的に配布したそのときの滞在記は、まさに野口さんの生き方を彷彿とさせるものです。その「まえがき」はこう結ばれています。「緑あふれる広大な土地をもち、アフリカで一番人口の多い国であるナイジェリアは、純朴で熱心な学生たちが力をつけて、いずれ大きな望遠鏡をもつ国へと変貌を遂げるであろうと確信する。」

野口さんから「房総はとってもいいところだから一度来てください」とお誘いを受けていたが果たせなかったのが悔やまれる。最後まで病状の悪さを微塵にも表さなかった孤高の人、野口猛さんのご冥福をお祈りします。

## 誇りをもって生きた野口猛さん

中桐正夫

(国立天文台天文情報センター 特別客員研究員)

2016年10月、野口猛氏の息子さんである理氏から手紙をもらい、これはひょっとして、と思い封を開けると、予感が的中しており、野口猛氏の

逝去を知らせる手紙であり、私にとってはまさしく驚愕のことであった。私は、渡辺悦二氏とともに1961年3月1日に岡山天体物理観測所に入り、

野口さん、乗本祐慈さんと仕事を始め天文台人生をスタートさせた。

岡山天体物理観測所で働き始めた最初のころの方々が次々と亡くなっていくなか、野口猛氏は最後に残った先輩であった。石田五郎さん、清水実さん、二宮久綱さん、大岸義忠さん、田口高さん、そして乗本さんまで亡くなってしまった。そして今回は、残った唯一の先輩であった野口猛氏の逝去である。

野口猛氏は、1960年の岡山天体物理観測所開所にあたって、地元で募集した職員に応募し、50人を超える応募のなか3人採用された第一期生の一人であった。

野口猛氏は1940年9月に北朝鮮の平城（ピョンヤン）郊外で生まれている。その翌年1941年12月8日、真珠湾攻撃があり太平洋戦争に突っ走る前の生まれである。親父さんは鉱山関連の技師で兵役は免除されていたが、北朝鮮で終戦、1年間の抑留生活を送り、栄養失調の6歳のとき、家族は必死の思いで帰国。しばらくは母親の実家である岡山県井原市に身を寄せ、その後、親父さんの仕事で青森県に移り、小学校を過ごしたそうである。その後、一家は岡山県浅口郡水島町（現・倉敷市水島）に移り、連島中学校2年生のとき、親父さんを亡くし生活は困窮しており、4人兄弟の長男として働きながら定時制の倉敷市立精思高校を卒業され、岡山天体物理観測所に入られたのである。

われわれ初期の岡山の技術者とも言えない高校卒の若者は、石田五郎さんを中心にイギリス製の188 cm望遠鏡の取扱説明書を読み英語の勉強をし、大学の第2外国語のドイツ語、そして大学教養課程の数学を学んだ。

野口氏は、清水実氏の薫陶を受け望遠鏡の技術の力量を高め、1975年には木曾へ、そして「すばる」へとその有能さを買われて転身を続け助教授で2001年3月に定年退職をされた。退職後の1年間はJICAのシニア海外ボランティアとしてパ

ラグアイで天文観測の指導に当たり、帰国後は日本福祉大学通信教育福祉学医療福祉マネジメント課程を4年間で卒業され、社会福祉士の国家試験に合格し、千葉県社会福祉会に入会登録され、家庭裁判所から依頼を受け法定後見人として、また千葉県障がい者スポーツ協会の副会長に就くなど社会貢献を生きがいに頑張っておられた。まだまだ活躍できる75歳での逝去は残念であつたらうと思う。

野口氏は定時制高校出身ではあったけれど、当時、世界7位の188 cm望遠鏡をもった岡山天体物理観測所で力量をつけ、105 cmシュミット望遠鏡を立ち上げ、8.2 m大型光学赤外線望遠鏡「すばる」の建設に携わり、エジプト・コッタミア天文台では不具合の188 cm望遠鏡の光学性能を回復させ神業と称賛されるなど、その多くの活躍は天文台技術系職員の鑑であった。

筆者は「すばる」建設で、岡山以来、再び野口氏と仕事を共にした。すばるに携わった技術陣の野口、中桐、宮下暁彦、沖田喜一の4人は「すばる」建設の中心であった海部宣男氏から「四天王」と呼ばれていたのであった。

最近では技術系職員の多くは大学院修士、あるいは博士を経て入ってくる時代になった。日本が世界に伍して観測天文学を切り開いていった時代の多くの天文台の技術陣は高校卒であったが、その実績・功績は野口氏をはじめ、その時代を生きたものとして誇りに思うものである。

心から哀悼の意を表し、お悔やみを申し上げます。

## 野口猛さんを悼む

沖田喜一 (元 国立天文台)

10月の初めに、一通の薄墨の便りが届いた。野口猛さんの訃報でした。ご子息の理君からのご逝去の挨拶が入っていました。たいへん驚いて、今年の年賀状を取り出してみると、そんな気配は微塵もない元気な様子がにじんでいる賀状でした。本当に突然のご逝去を謹んで追悼いたします。

野口さんとは、私が1967年4月、東京天文台岡山天体物理観測所に文部技官として入所したときから、随分長い年月を、さまざまな状況の中で、共に過ごしてきました。私の入所当時の岡山天体物理観測所は開所して7年目で、文字どおり、東洋一の天文台として成果を上げ、活動盛んな時期でした。その一期生として入所された、野口さん、乗本さん、渡辺さんなど、数人の技官が元気に活躍されていました。近隣の出身の方々が多く、地元の優秀な人材として採用されたという感じで、おお、これはすごい所だと気が引き締まったことを思い出します。それぞれが個性を生かし、適材適所で力を発揮していました。その長兄として、野口さんは存在し、清水実さん主導のもと活躍しておられました。

その頃の技官職は、高卒で就職の方がほとんどで、学歴を云々という雰囲気はなく、OJTを基本として、全員がチームとして仕事をこなしていました。独身者が多く、毎年行われる、地元鴨方町、矢掛町の軟式野球大会に出場し、そのチームワークで活躍をし、優勝も何度かしました。皆、若くて「文武両道」のツワモノ？ だったのでしょう(写真1)。

観測所での技術職員の主な仕事は、夜間観測時の望遠鏡オペレーションと、望遠鏡の保守整備、観測装置の保守点検でしたが、少しずつ初期の観測装置の改良・改造が必要になった時代でもありました。188 cm望遠鏡の観測装置の主な検出器は、写真乾板の時代でしたが、徐々に電子検出器



写真1 1970年8月、野球大会の試合後にくつろぐツワモノ？ 右から2人目が野口さん。左端は筆者。

に変わっていく時代の始まりでもありました。また、サブ望遠鏡として設置された91 cm望遠鏡では、測光観測を行うための電子技術が多用され、いろいろな技術が必要になっていきました。少ない費用で良いものを供給するため、設計、部品製作、組み立て、試験などを自前でも行えるよう、技術職員の私たちも、皆で議論しながら、新技術を取り入れた観測装置の製作に着手することが多くなりました。そんな中で野口さんは、先頭に立ち、指導をしてくださいました。野口さんは、とても勉強家で、いろいろな書物を読み、アイデアをもっておられました。「沖田君は発想と閃きは良い」と褒められた？ こともありました。もちろん意見が合わないで激論になったことも多々ありました。

その頃、最先端の観測を行うには何が必要か、どんなアイデアがあるかと、いろいろな研究会も行われ、それに出席することも大切な課題でした。野口さんは、そんなとき、「研究会などに出席して、一つの質問もしないで帰るようではいけない。関心をもって、わからないことは、恥ではないので遠慮なく質問をすべきだ」とよく言って



くれました。私は、その教訓を守るべく、必ず一つは質問をするよう心がけましたが、そのおかげで、私が口うるさい人間になったということはないと思っていますが…。

野口さんと一緒に、7年間、岡山観測所で仕事に日々励んでいましたが、1975年、シュミット望遠鏡の建設を推進する重要な戦力として、野口さんは木曾観測所に転勤されました。そのとき、「今後は、清水実さんを補佐し、大いに活躍してくれ」との強い想いを託されたことを思い出します。野口さんは木曾観測所の建設、立ち上げと、持ち前の努力とバイタリティーで多くの業績を残されました。私も、出張で木曾観測所を訪れると、観測所の皆さんとともに、技術談議を楽しみました。また、このころ野口さんは、行政職から教育職の助手に昇格され、われわれ技術系職員のキャリアアップの先達となり、私たちもそれを目指して後に続くよう目標にするようになりました。

一方、日本に188 cm望遠鏡に代わる大型望遠鏡の建設の要望が、多くの天文研究者からでてきて、それに向けて、有志による勉強会が始まり、いろいろな研究会が各地で行われるようになりました。1981年、岡山天体物理観測所の地元鴨方町で、「天文観測（主に光学）に関する技術研究会」が、野口さんの呼びかけで行われました。この研究会はその後、技術系職員の手で毎年開催され現在37回の開催となっています。第1回の集録の巻頭に、「天体観測に関連した技術の応用は、単に望遠鏡を作るのみならず、多岐にわたった測光機器の開発、さらには得られた情報に対する処理技術の開発と、天文学を行う手段として不可欠である。各機関の観測天文学を支えている多くの人々の情報交換の場として…技術主体の研究会が初めて開催された」と、野口さんが記しています。まさに、天文学分野での技術の大事さを述べておられます。

野口さんとはいろいろな研究会や会合でたびた

びお会いし、大型望遠鏡の建設の実現に向けていろいろと話をしたことが思い出されます。10年近くの検討と、紆余曲折がありましたが、多くの方々の協力を得て、大型望遠鏡の建設の気運が高まり、大型光学望遠鏡建設計画実現のために、三鷹にすばる望遠鏡建設推進グループができ、そこから野口さんは中心メンバーの一人として参加されました。私も、1991年に岡山観測所からそちらに参加することになり、また、三鷹の地で一緒に仕事することとなりたいへん頼もしく感じました。

「すばる望遠鏡準備室」時代は、筆舌できないほどのいろいろな作業があり、裏方仕事の大番頭の力を遺憾なく発揮され、小番頭のわれわれを指導いただきました。夜遅くまでの概算要求資料の作成、メーカーとの打ち合わせ等々、本当にたいへんでしたが、それも今となっては懐かしい思い出となっています。すばる望遠鏡の完成までの期間中、次々と派遣される人たちの下支えとして、日本に残り、重要な職務に専念していただき本当に有難い存在でした。

1999年12月、すばる望遠鏡はファーストライトをめめたく迎え、ハワイ観測所が発足した直後、国立天文台を定年退官されるという巡り合わせになりましたが、退職後も、持ち前の努力と培ってきた技術を生かし、JICA シニア海外ボランティアとして、パラグアイで活躍されました。時折々のパラグアイ便りをいただき楽しませていただきました。奥様との仲睦まじい写真を拝見し、奥様孝行を微笑ましく感じておりました。

好きなことをやり遂げ、楽しみながら人生を送られたこと、「人生夢あり」を全うされたことを想定しながら、心からのご冥福をお祈りいたします。

## 野口猛さんとの思い出

青木勉 (東京大学・木曾観測所)

私が野口さんとお会いしたのは、木曾観測所のシュミット望遠鏡の立ち上げに合わせ木曾観測所に転勤してからすぐのことであったと思う。1974年7月下旬から望遠鏡の搬入・組み立てが始まった。木曾の職員だけでは心もたなく、岡山中で望遠鏡立ち上げの豊富な経験をお持ちだった、清水さんや野口さんらが総出で応援に来てくださっていた。

亡くなられた石田五郎さんが野口さんに「望遠鏡もいずれ故障するだろうから、建設現場をよく見て構造を理解しておくように」と言われたそうだ。それを物語るスケッチが今でも木曾観測所に残されている(写真1)。当時は、デジカメもない時代だったとはいえ、構造を理解するための強い気持ちが込められた1枚だと思っている。こうした経緯もあってか、野口さんは1年後の1975年12月に木曾の職員として赴任された。以来1987年までの12年間木曾観測所に勤務され、その後すばる望遠鏡立ち上げのため、国立天文台・光学赤外線天文学研究系に移られた。

木曾観測所はその規模からいって至極まとまりの良い観測所である、と何人かの方から聞いたことがある。適度な規模だからこそ、さまざまな技

術的課題に対しても、新米の我々を上手く割り当て育てていただけたのだと思う。与えられた課題に取り組んでいたら、知らぬ間に独り立ちできる技術者になっていた。そんな気がしてならない。野口さんが木曾におられた期間、私の殆どの仕事に関わって頂いた。大げさかもしれないが、現在の私があるのも、木曾観測所での技術的な仕事の先達としての、野口さんの影響は誠に大きかったと思っている。

観測所立ち上げの初期の頃には暗室の整備や上水道用のダム整備など、時には大工になり、時には土木作業もこなした。そうした仕事が一段落し本観測に入る前、私は野口さんから写真乾板の超増感実験を任せられるようになった。毎日暗室作業の繰り返しではあったが、それらをまとめた結果を1977年の「シュミット望遠鏡に関連した天文学シンポジウム」で発表することになった。これがきっかけで、翌年には天文台報に論文を投稿することができたし、学会での発表も行うことができた。当時ワープロがまだ無かった頃、台報やシンポジウムの集録などの原稿作成は大変であった。これだ!と思って書いても、残念なほど真っ赤に修正されて戻ってくる。特に最初の東京天文

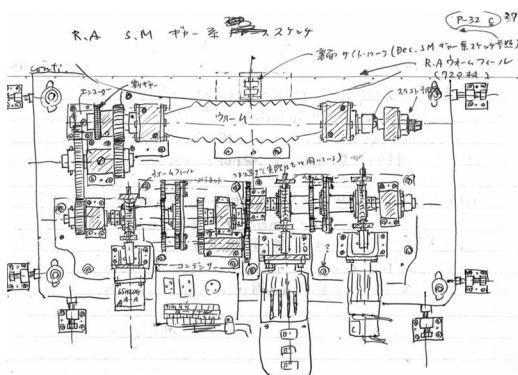


写真1 RA軸駆動系のスケッチ。



写真2 熊本の学会後阿蘇山にて。右端はM. Rahartoさん。

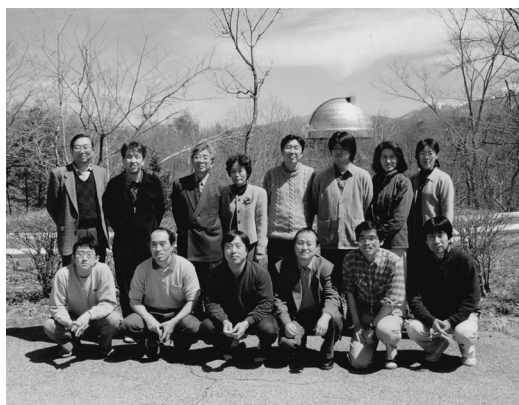


写真3 野口さん夫妻を囲んで、定年退官後の木曾  
来訪記念（2001年4月5日）。

台報では、最終的な原稿に仕上げるまでに、6回も書き直した下書きが残っている。今思うと、気が遠くなってしまうが、これらもすべて最後まで野口さんに面倒を見ていただいた。

シュミット望遠鏡は設置当初から計算機による制御が可能な望遠鏡として稼働していた。最初の計算機は記憶容量が24 KバイトのOKI4300Cというミニコンピューターが使われていた。容量が少ないがゆえに、望遠鏡制御ソフトウェアの改修には機械語を巧みに使いこなさなければ、十分な開発はできない状況であった。野口さんは岡山で同機種が使われていたことから、集中してプログラムの不備の改修に努めておられた。後から調べてみると、正に芸術的とも言えるほどの巧みなコーディングであった。その後1983年頃から本格的にマイクロコンピューター（IF-800）が使われ始めた。私はディスプレイをはじめ入出力が一体となったこのマイコンに非常に興味をもち、マイコンのプログラム開発に積極的に関わり始めた。計算機のプログラミングに関しては野口さんからも積極的に後押しして頂いたように思う。最初に手掛けたのは、望遠鏡制御用のミニコンとマ

イコンとをRS-232Cを介して接続し、望遠鏡の入出力を大幅に改善する開発であった。それを手始めに、その後はどんどん計算機のプログラミングにのめり込んでいった。これはもしかすると、野口さんの芸術的なプログラムに痛く感心した、あの時から始まったのかもしれない。

野口さんはたいへん温厚な人で、私が鈍感なのかきつく叱られたことを覚えていない。しかし、真が強く自分が決めたことはしっかり守る人でもあった。そんな中でも、「木曾の技官はよくやっている」と言われて周りから褒められると、我が事のように嬉しそうな顔をされていたのを思い出す。当時木曾観測所では、満月の前後に下山しレクレーションと称して、麻雀や飲み会を行っていた。ある時、飲んで連絡所に集まった際に、定年後はどんなことをしたいと思っている？ という話になり、野口さんは「南の島で、日がな一日釣りをして過ごす」という話をされていた。ハワイで仕事をされていた時期には、その頃のことを思い出しておられたのかもしれない。

野口さんに最後にお会いしたのは、高瀬先生が亡くなられた告別式の時であった。その日の帰り際に、野口さんらと近くのレストランで昼食を一緒に取ることにした。私は以前から清水さんや野口さんの定年後のご活躍を知るにつけ、自分も定年後はそのような活動がしてみたいと思っていたので、野口さんにそうお話をすると、野口さんは「実現するのは結構たいへんだよ！」と言われた。きっと人知れぬご苦勞があったのだと感じ入る言葉であった。野口さんは私にとって、仕事の先輩のみならず、人生の師とも言える存在であったと思う。そんな野口さんに最後のお別れを言わなければならない日が来てしまった。誠に残念でならない。